

武蔵野日曜聖書講筈 復活節

十字架と復活

——ルカ伝第24章1～49節——

1980年4月6日

小池辰雄

キリストの実存十転 教会と無教会の大欠陥 内村鑑三とヒルティ 南無キリスト 絶対矛盾の自己同一 キリストの義が贖罪によって与えられる 霊体として甦った 至道無難 枯木龍吟 地上において甦りの生命をいただく

【ルカ24・1～49】

1 一週ひとまわりの初はじめの日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。2 然るに石の既に墓より転まわばし除けあるを見、3 内に入りたるに、主イエスの屍しかばね体を見ず、4 これが為ために狼狽うろたえおりしに、視よ、輝ける衣きを著きたる二人の人その傍かたわらに立てり。5 女たち懼おそれて面おもてを地に伏せれば、その二人の者ひという『なんぞ死しにし者ものの中に生ける者を尋ぬるか。6 彼は此こ処こに在いまさず、甦よみがえり給たまえり。尚なほガリラヤに居給たまえるとき、如何いかに語り給たまいしかを憶おもい出いでよ。7 即すなはち「人の子は必ず罪ある人の手に付つされ、十字架につけられ、かつ三日めに甦よみがえるべし」と言い給たまえり』8 ここに彼らその御言を憶おもい出いで、9 墓より歸りて、凡て此等これらのことを十一弟子および凡て他の弟子たちに告ぐ。10 この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハンナ及びヤコブの母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告げたり。11 使徒たちは其の言ことばを妄語たわごとと思おもいて信ぜず。12 「ペテロは起たちて墓に走りゆき、屈かがみて布のみあるを見、ありし事を怪しみつつ歸れり」

13 視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔りたるエマオという村に往きつつ、14 凡て有りし事どもを互たがひに語りあう。15 語りかつ論じあう程ほどに、イエス自ら近づきて共に往き給たまう。16 されど彼らの目遮さえられて、イエスたるを認まむること能あたわず。17 イエス彼らに言い給たまう『なんじら歩みつつ互たがひに語りあう言ことばは何ぞや』かれら悲しげなる状さまにて立ち止とどまり、18 その一人なるクレオパと名づくるもの答えて言う『なんじエルサレムに寓やどり居て、独ひとり此の頃かしこに起おこりし事どもを知らぬか』19 イエス言い給たまう『如何なる事ぞ』答こたえて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前まへにて、業わざにも言ことばにも能あたりある預言者なりしに、20 祭司長ら及び我が司つかさは、死罪に定め



んとて之を付し遂に十字架につけたり。21我らはイスラエルを贖うべき者は、この人なりと望みいたり、然のみならず、此の事の有りしより今日はや三日めなるが、22なお我等のうちの或女たち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝風く墓に往きたるに、23屍体を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは活き給うと告げたりと言う。24我らの朋輩の数人もまた墓に往きて見れば、正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき』25イエス言い給う『ああ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ。26キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』27かくてモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録したる所を説き示したもう。28遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、29強いて止めて言う『我らと共に留まれ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』乃ち留らんとて入りたもう。30共に食事の席に著きたもう時、パンを取りて祝し、擘きて与え給えば、31彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えざり給う。32かれら互に言う『途にて我らと語り、我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』33かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言う、34『主は実に甦えりて、シモンに現れ給えり』35一人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うによりてイエスを認めし事とを述ぶ。36此等のことを語る程に、イエスその中に立ち『平安なんじらに在れ』と云い』給う。37かれら怖じ懼れて、見る所のものを霊ならんと思いに、38イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、39我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』40〔斯く言いて手と足を示し給う〕41かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、イエス言いたもう『此処に何か食物あるか』42かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、43之を取り、その前にて食し給えり。

44また言い給う『これらの事は我がな汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言ひし所なり』45ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う、46『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦えり、47且その名によりて罪の赦を得ざる悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの国人に宣伝えらるべしと。48汝らは此等のことの証人なり。49視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留まれ』



●キリストの実存十転

復活節を迎えて多分40回目になります。内容的には繰り返しになるわけですが。しかし、何回やりましても、私自信は新しい気持ちです。題としても、

「十字架と復活」

というような題を復活節に書いたのはおそらく今日が初めてです。今日はまた、私は4時ころ目が覚めてしまった。どういうことにしようかと、白い紙の前に立つと、自然に浮かんでくるので、妙なものです。題は書くまでわからない。書こうとする時にひらめいてくる。著作集の第一巻『無者キリスト』は何といつても一番の根底になっているので、第一巻は時々読んでみてください。その第一部に「キリストの実存十転」と書きました。受肉（降誕）、受洗、霊戦、伝道、変貌、十字架、復活、昇天、霊降、再臨の十転です。特に若い人はよく勉強してくださいよ。

「受肉（降誕）」も、聖霊によって彼は降^{くだ}ってきたんです。聖霊によってマリヤが身^みごもった。「受洗」は、ヨルダン川で洗礼のヨハネから洗礼を受けた時に、ヨハネはそういう力を持っているなかったけれども、キリストは悔改めのバプテスマを受けながら——彼は悔改める必要はもろろんない。我々に代わって受けたわけです——水から上がってきたら、聖霊が鳩のごとく臨んできた。これもやっぱり聖霊が降ってきた。

「霊戦」は、キリストはサタンと神の霊において戦った。

「伝道」は、もちろん聖霊の力で、その言葉も業^{わざ}も全部そうです。

「変貌」は、聖霊が充滿している彼が太陽のごとく真つ白に輝いてしまった。

「十字架」には輝きがないと、こういうわけです。

「復活」は霊体として現れましたから、墓石が彼の聖霊の霊震によって転がされてしまった。

「昇天」ももちろん、御霊の力です。

今度は聖霊が降って、やがて「再臨」となる。

「十字架」は、それでは聖霊がないかというところ、冗談じゃない。これは聖霊のどん底の力です。結局、キリストというひとは全部、霊において動いているんです。全部、これは聖霊の働きです。これほどまでに聖霊の現実なんです。それを今のキリスト教は何だと言うんだ。完全に観念化してしまっている。

●教会と無教会の大欠陥

内村先生は、もともと非常に優れた人物です。やはり御霊の力が、神霊的な力が彼には、ある意味において備わっていたし、それによって書くもの言うものにその力が確かに内村先生にありました。先生の文章は作られた文章ではない。本当に全存在をもってぶつけたような文章です。だから、力がある。今年が五十周年で、また内村鑑三全集が岩波から出ますが。



こないだ私が「無教会と聖霊」と題して語ったでしょ。

「先生は聖霊によつてとにかく動いていたけれども、まだちよつとその聖霊の働きが使徒たちの次元からはズレていました」

と、私は言っていると思う。そんなことは、内村鑑三記念講演会ではおそらく誰も言わんだろう。今度はたくさん講演会がある。昔の私だったら、あの中の一人になる。けれども、私は外されている。

「小池は変わってしまった」

というわけだね。それは変わったよ、確かに。変わったのではない。前進したんです。

内村先生は、聖霊のことは語っていらつしやる。けれども、十字架との関わりにおいてはつきり言っているところがない。

「聖霊は十字架が土台でなければどうにもならん」

というような角度から内村先生がもし書いているところがあつたら、私に教えてください。聖霊が本当に十字架の土台においてつかまれているところ、いわゆる教会と無教会の大欠陥がある。

手島さんと私は少し違います。けれども、とにかく私は、十字架の土台なくして聖霊のことは言えない。それは何も私がではない。キリストが十字架以前にいくら聖霊をじかに弟子たちにやろうとしたつて、これはダメなんです。

「十字架における贖罪を通らなければ、お前たちには聖霊は来ない。今、お前

たちは私に躓く。けれども、私が受くべきバプテスマを

「受くべきバプテスマ」と言ったのは十字架のことです。

これを通つたら、今度は聖霊をくだす。そうしたら、私が言つたりしたりしたことが全部わかるぞ。ペテロよ、お前を、魚をすなどるのではなくて、人をすなどる人にしてやるぞ。けれども、今はダメなんだ。今に、私が十字架にかかる前に、お前は私を三度否むぞ」

と。その通りになつてしまった。そのことを思い出して、ペテロは泣いたという。悔やんだけれども、どうにもならん。

「けれども、待っている。お前たちは祈って待っている。今に集めるぞ」

と。そういう人です、キリストというひとは。だから、贖罪の十字架を通つたら、今度は聖霊が臨む。旧約聖書にも神の霊のことがたくさん出ている。けれども、この新約でいう聖霊ではない。聖霊というならば、キリストの十字架によつて、そのあとからキリストから与えられたところの霊が、これだけが聖霊なんです。これははつきりしてもらいたい。

その十字架の担いというものは、キリストは聖霊の力をもつて担っていた。我慢してただ十字架にかかったのではない。

さつき歌った私の讚美歌「わがみ神よ」（召団讚歌A5）の1節、2節に、



1 「わがみ神よ 十字架の

この苦杯を 取り去り

み許にゆき 父と共に

とこしなえに 在りたし

2 されど我は み父の

み旨により 十字架を

負いて往かん ゴルゴダへと

我を棄てて 従わん」

とある。それは贖罪の使命をキリストははつきり受けとったから、いきなり天界に行かないで、十字架に行かざるをえなかった。この十字架を担う力は御霊なんです。その同じ消息を私は、「使徒らの昔を」(召団讃歌B2)の讃美歌で、我々の実存の面で歌ったでしょ。

1 使徒らの昔を 慕いて我は

みふみ 聖書に読み入り 祈りてあれば

み霊の我が主は わが身を抱き

十字架に耐え得る力を賜う

という。「み霊の我が主」というのは聖霊の主です。主の聖霊がやって来て、私をしつかりと捕まえてくださるから、それで、

「汝、おのが十字架を負いて我に従え」

という、その私たち一人びとりが賜るところの十字架を担うところの力が来ている。だから、

「十字架に耐え得る力を賜う」

という。「たまわん」ではない、「たもう」です。力強く受けとってくださいよ、皆さん。私はいいい加減な気持ちでこんな歌をつくっているのではないから。

もう今のキリスト教はダメですよ。無教会が何人いようと、私はびくともしない。こないだも、神学の会がありましたね、行くけれども、やっぱり

「ただ一つを欠く」

だよな。『無の神学』で徹底的にそのことを書きますから。「無」なんて言うと、必ず誤解される。とにかく、私は自分の確信、人間的な自分の確信でも何でもないから、大変楽なんです。

●内村鑑三とヒルティ

天野貞祐先生は、中学生時代に身体を丈夫にするために野球部に入った。ところが、滑り込みで失敗して捻挫してしまった。治療に時間がかかってしまって、故郷に帰ったらそこで腸チフスに罹って、お母さんは同時にお罹りになって天界に行ってしまった。彼はやっ



遺物』という小さな本に撃たれて、彼の人生観がそこに立った。学校に4年遅れてまた入ってきた。

「お前それでも中学生か」

と言われたそうだ。けれども、入る時に——全科目の編入試験ですよ——16人受けて天野先生だけがパスした。その時に猛烈に勉強したんだ、内村先生の原動力で。

「高尚にして勇敢なる生涯」

というのが、『後世の最大遺物』の最後の結論です。これは誰でもができるはずだ。何をしていた方がいいが、

「崇高なる心と勇敢なる魂で行け」

という。4年のマイナスが限らないプラスをそこにもたらした。

だから、受験で落ちたつて、そんなことは問題ではありません。大事なものをその1年間で2年間でもいいから、つかみなさい。それで展開していこう、

「人生のマラソン競争の勇者になるぞ」

と、そういうことなんですよ。

また、天野先生は旧制一高のときヒルテイでもって非常に内容ができた。内村先生で脊椎骨ができて、ヒルテイで肉ができたようなものだ。私はヒルテイのことを書いたでしょ。天野先生に捧げてある。あの本も入門書として大事な本なんです。よく読んでください。積読はダメだよ。天野先生の魂がそれでできたから、若い人に私は言うんです。内村鑑三とヒルテイを読めと。話はだいたいぶズレてしまったけれども、どうぞ、若い方があつたら、そう言つてあげてください。

●南無キリスト

キリストは十字架で贖罪を——己が生命を捨てて、自ら大祭司となり小羊となつて——旧約聖書を完全に彼は一人で十字架でもつて全うしてしまつたわけです。我々の我執は全部、贖つてしまつた。私の現在も過去も未来も、私は全部キリストに贖いとられていて、もう問題は何もない。私がどんなにダメな野郎であつても、そんなことは問題でない。ダメな野郎のためにキリストは十字架にかかつてくださつたんだから。親鸞の歎異抄と同じです。

私は無私の世界に、私心のない世界に入れられた。私心があることが「罪」なんです。我執があることが罪なんです。これは万人が共通なんだ。どんな偉い人でも、ダメなんだ。キリストとお釈迦さんくらいなものだ。孔子もダメだよ。

「七十にして心の欲する所に従つて矩を踰えず」

なんてやっているんだから。キリストとお釈迦さんだけです。そういう素晴らしい無比の根底を十字架は私に賜つた。あなた方一人びとりに賜つた。皆さんは絶対恩寵における無



者なんです。自分なんてものを問題にしていない人間です。自分を問題にしなくなると、問題にするのはキリストだけになる。

「キリストだけがわが一切」

という気合になつてくるでしょ。別に「信仰」なんていう言葉を使わなくてもいい。キリストは無限無量者でしょ。だから、

「無即無限無量」

と申し上げているわけです。これは悟りでも何でもありません。恩寵の現実、恵みの現実なんです。だから、楽しくてしようがない。楽でしようがない。

あんなに躓いたり転んだりして終いにはキリストを否んだペテロが、目が覚めた。聖霊がやってきた。

「私には金銀はないけれども、わがうちにあるものを汝に与える」

とペテロが言った。キリストの御霊です。御霊の力で、生まれつき足の不自由な人が立つてしまったではないですか。私みたいな者を使つても、神さまはずいぶんいろんな不思議なことをなさった。それは聖霊なんだから。

いいですか。人間はお互いさま五十歩百歩だよ。そんなものは問題にしなくていい。

「先生はそうでしょうか」

なんて、そうじゃないですよ、先生なんてものは一番ダメなんです。あなた方は本当にキリストの中に南無すれば、

「南無キリスト！」

と言って、帰入すれば、祈入すれば俄然、力がくる。可哀相な人や困っている人がいたら、それを現場で実際やりなさいよ。やらなければダメですよ、いつまでたつても。

「わがうちにあるものを与えよう」

と。自分でびつくりしますよ、キリストが働きたもうから。

「まだ、私は信仰が手前ですから」

なんて、信仰が手前もヘツタクレもない。私は自分の信仰なんか持つてないですよ、そんなものは。信仰なんかを計算しているからダメです。

「私の信仰はまだうすくて、もう少し聖書の研究をしてから」

なんて、何を言っているか。いいですね。この集会の人はもつと烈々たるものをうちに持つてください。

●絶対矛盾の自己同一

そういう十字架です。だから、事実、十字架で躓い事を担いながら、「彼らを赦したまえ」と言われた。

「彼らを赦したまえ。そのなすことを知らざればなり」



というのはキリストの他に誰も言えないんです。

今、読んだルカ伝の少し前の方の23章に出ている。キリストの祈りは直ちに聞かれている。贖罪をしていらつしやるから。キリストの十字架の両側に傲慢なやつと、それから、

「もうしようがない。自分はさきん悪いことをしたけれど、せめても覚えて

ください」

と心が砕けた片一方の盗賊がいる。そうしたら、その心が砕けると、キリストはもう無条件です。心が自分を立てているやつは、これは地獄行きです。

「申し訳ありませんでした」

と言つてひれ伏しているのが天界へ行つてしまふ。

「汝、今日、我と共にパラダイスである」

とキリストは言われる。

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだよ」

と。そういう訳が一番端的でいいでしょう。「お前は今日、私と一緒にパラダイスだよ」と。

「パラダイスにあるべし」

なんて言つたつてダメだ。

「パラダイスだよ」

でいいよ。一番先に、悔い改めた盗賊が天界へキリストと一緒に入つてしまった。これが福音、喜びの音信おとずれです。

そういう言葉と一緒にキリストは絶対矛盾の自己同一みたいに、

「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

と叫んだ。

「なぜ、私をお棄てになつたんですか」

というのは、キリストは自己主張をしているのでない。

「あなたの義がたちますか。あなたに100%に私は従つてきましたのに」

というわけだ。これを義人という。神さまとの縦の関係です。

「この私をお棄てになるなら、この関係が切れてはしませんか。義をどうしてくれるんですか」

という言い方なんです。これは神の義の主張なんです。神の義を絶叫しているわけです。

「赦したまえ」

という言葉と、

「なんぞ我を棄てたまひし」

というのが、正に十字架になつていっているんです。「赦したまえ」というのは人への愛ですから。



●キリストの義が贖罪によって与えられる

これをはつきり言っているのがローマ書3章です。21節、

「21然るに今や律法の外おきてほかに神の義は顕れたり、これ律法と預言者とに由りて証せられ、22イエス・キリストを信ずるに由りて凡て信ずる者に与えたもう神の義なり。之には何等の差別あることなし。

その人がどうだこうだなんて、そういう問題ではないと。

23凡ての人、罪を犯したれば

即ち、我執でもって生きてきたから、

神の栄光を受くるに足らず、24功いさおなくして神の恩恵めぐみにより、

恩恵はキリストの十字架と復活、全部です。

キリスト・イエスにある贖罪あがないによりて義とせらるるなり。」(ロマ3・21、24)

なぜ、神さまは棄てたかという、

「この義を他の者にやるために、お前は贖罪の死を死ぬわけだ」

と。だから、キリストを受けとる者は、信ずる者はこの義が与えられる。神さまとの間に立っていたキリストの義が贖罪あがないによって与えられる。

「25即ち、神は忍耐をもて過ぎ来しかたの罪を見逃し給いしが、己の義を顕さ

んとて、キリストを立て、その血によりて信仰まことによれる宥めなだの供物そなえものとなし給

えり。」

「宥めなだの供物そなえもの」とは妙な言葉ですね。神さまは罪に対しては怒る。

「その怒りを贖罪あがないによって神さまを宥めなだる」

という言い方なんです。

義が通れば、私たちは死んでしまうんですよ。死ぬべからざる者がここに死んだんでしょ。

不義に対しては義が、神さまの義が、人間の不義に対しては

「罪の価は死なり」

とあって、死をもたせらる。ところが、この義人を殺したということによって、その義が罪びとの方に与えられるということになる。これが「罪の贖い」です。私たちは死刑囚だよな、神さまに対しては。死刑に処せられても仕方がない。ところが、その罪はもう全部ご破算あきらにしてしまった。

「キリストという罪なき者がお前に代って、その死をみんな受けてしまったから、

お前は死なないですんだ」

というわけです。ということは、パウロが言った通り、

「われキリストと共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず。キリス

トわがうちに生き給うなり」

となつてくるわけです。



「²⁶これ今おのれの義を顕して、自ら義たらん為、またイエスを信する者を義とし給わん為なり。²⁷然らば誇るところ何処にあるか、既に除かれたり、何の律法おきてに因りてか、行為の律法か、然らず、信仰の律法に因りてなり。」(ロマ3・25～27)

「信仰の律法」と、おもしろい言葉を使った。逆説的な言葉です。律法をいくら全うしたって、私たちが律法を全うすることはできない。

「すべし、すべからず」

は一応、道徳の世界としてやらなければいかんですよね。それはけつして悪くはない。結構なことなんだ。けれども、それは相対的な次元にしかいかない。その先は行き詰まってしまう。いくらやつても、やっぱり人間の自我というやつが妨げになっている。この自我というやつがすつ飛ばされなにかぎりダメなんです。

これはすつ飛ばされない。十字架だけがすつ飛ばしてくる。それが我なき我ということです。我なき我となる。新しき我となる。旧き我もいますよ。現実の我々は矛盾構造です。仕方がない。信仰的現実においては我々は義人であるけれども、相対的現実においては罪びとにすぎない。この「義人」の義の字はキリストの義です。

●霊体として甦った

キリストはその十字架でもって完全に贖ってしまった。そして、彼は力を持っているから——担ぎこまれて墓場の中に入ってしまっただけでも——その罪なき身体が今度は霊体に化せられてしまう。時々、素晴らしい聖者がいますよ。むしろカトリックの世界にいる。

時々お話しするけれども、ギリシア半島のどこかの島にいた神父です。これは死んでも死後硬直を起こさない。

「その腹より水が湧き出る」

とキリストが言われたように、何か知らんけれども、霊水が流れている。足の不自由な人が行けば立ってしまし、目の見えない人が行けば目が開いてしまし、お医者さんの立ち合いのもとにそれが現実に証しされて、医者もびつくりしてしまつたという。次元がちがう。そういう人がたまにいます。アツシジのフランシスだの、ザビエルだのというのはみんなその次元にいるような人たちだった。ザビエルの伝道なんていうものは大変なものです。日本語なんか分からなくなつたって、向こうの言葉を発していれば、霊言だから、それに撃たれてしまう。

まあ、御霊の世界は、私たちは、

「われキリストと共に十字架せられたり」

と本当に祈りこむと、自分が本当にもうすつ飛んでしまつて無にされてしまつと——虚無ではないですよ、私心のない我にされていると——祈っていると、御霊が、聖霊がくるも



のね。無教会や教会の一般の信仰ではそこまでいってない。だから、

「それは観念です」

と言っている。悪くはないけれども、うそではないけれども、観念だ。観念でなくて、本ものになってくださいよ。そうすると、聖書はベールがとれる。私は聖書のバプテスマを受けてから、聖書のベールがとれてしまったんだから、仕方がない。今まで何を讀んでいったかと思つたくらいです。楽になってしまった。日本語で結構です。後ろから、聖書の根源語、神の根源語が響いてくる。ギリシア語やヘブライ語ができなければ聖書はよりよく分らないなんて、冗談言うなど。かえって、あまりできるやつは文法的に言葉にこだわってしまつて、

「儀文は殺し靈は生かす」

という儀文の方になってしまふ。

そういう霊体として、彼は甦つてきました。これは自在に霊体だからね。霊界から現れてくる。物理の世界よりかやっぱり霊の世界の方が何ととっても凄い。ただ神靈的なことを言っているのではないですよ。間違えないでください。

●至道無難

これは碧眼録の第二則の頌なんです。

「至道難こと無し、言端にして語端なり。」

一に多種有り、二に両般無し。

天際に日上り月下り、檻の前に山深く水寒し。

觸體識尽きて喜何ぞ立らん、

枯木龍吟して銷ゆるも未だ乾かず。

難し難し。揀択と明白と、君自ら看よ。」

「至道無難」

とはいい言葉だね。第一則は

「廓然無聖」

です。やはり仏教には素晴らしい言葉がある。聖書の中にはこんな言葉は出てこない。けれども、聖書の次元からみると読めるから。私は今度の『無の神学』では、こんなものは自在に出できます。ここにも「無」がでていまして。無難という。

「我は道なり、生命なり、真理なり」

とキリストは言われた。あの「真理」という訳は、私はあまり感心しない。「真理」というとすぐ観念的に響くものだから。「誠なり」でもいい。

「我は道なり、生命なり、誠なり」

でいい。聖書における真理というのは、必ず実現するものなんです。実現しないものは真



理ではない。キリストという人こそ、

「我は道なり。我は至道なり」

と言っている。だから、福音の光で見てごらん。逆に今度はこの文字がもつと生きてくる。キリスト以上の至道を歩いた人がいますかね。いないでしょ。キリストは道の極みです。もうこれ以上の道はないという道だ。それはある意味においては、無道と言ってもいい。「無道の道」というのは老子の言葉だ。道無き道。禅宗でもいいですよ、「無念の念」とか。「無義の義」とか。あれは浄土真宗だ。だから、至道無難。至れる極致の道は難しくないと。」「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

というのは、その中に入ってしまうと、ちつとも難しくない。キリストはいわゆる三段論法の理屈なんか言わない。断言命法だ。

「幸いなるかな、悲しむ者」

なんて言って、淡々としているんだ。だから、

「言端にして語端なり」

という。実に単純なんです。文学でも最高のところは表現が単純になってくる。あまり形容詞なんか使わない。ダンテでもゲーテでもそうです。

至道無難、言端たんにして語端たんなり。

と。言うところまた語るところがまことに端的であると。ちつとも難しくない。福音はちつとも難しくありません。それをややこしく、難しくしてしまうものだから、「聖書の研究会」なんてことになってしまっただよ。そのところは、内村先生は間違えた。

『聖書の研究』

なんていう雑誌を出すものだから、一生懸命でギリシア語やヘブライ語で研究をはじめた。間違いと言ってはわるいけれども。まあ、あの人たちはみんなエリートだからね。無教会というと学者が多い。本式にとくめば私は負けやしないよ。私だって、無教会で一番先にヘブライ語をやったんだから。ヘブライ語のクラスを三年間持った。けれども、そういうことが問題になっていたらダメなんです。

「二に多種有り」

一有れども多種なりと。たった一である。即ち、絶対的な無難の境地は、これは一なんです。けれども、その内容は多種多様であるということ。

「御霊は一つであるけれども、賜物は様々なり」

ということと同じこと。

「聖霊は一なり」

ということだ、この「一」というのは。絶対境を与えるところの聖霊は一つだが、それから派生してくるところのものは多種多様だということ。皆さんはいろんなことをしていらつしやる。それでいい。みんな同じことをしていたらダメなんだ。けれども、御霊に



おいて一つだということですよ。

「二に両般無し」

二なれども両般なしと。これは解釈の仕方が二通りある。私はこうとる。「二」即ち、絶対と相対と二つあるけれども――「両般」というのは「両個」ということです――二つではない。二なれども二にして二にあらざること。二にして二になし。

「絶対と相対は一応あるけれども、相対即絶対、絶対即相対という関係に入らなければ本当の絶対はつかめないよ」

ということですよ。絶対と相対をただ分けてはダメです。普遍と特殊がまた即するんです。特殊の中に普遍が現れてくる。

たとえば、漱石の文学というのは漱石特殊の文学です。けれども、そこに人間性という普遍が本当に深くでている。それは絶対在即するんです。日本人の書いたものだけれども、世界に通ずる。ゲーテがそうです。ドストエフスキーがそうですよ。その国でなければ通じないようなものであったらダメだ。それは特殊であり相対であるにすぎない。そこに絶対的なものが来てなければダメなんだ。

私は第二巻でゲーテとダンテを書きましたが、ゲーテとダンテは非常にちがうけれども、どっちも実に共通なものを持っている。第一級の人物はみんなその霊的なところにタッチしているからね。

天際に日上り月下り、檻の前に山深く水寒し。

天の際は、東の方の際から日が上って昇つてくると、西の方の際で月が下りていく。まことにこれは自然法則のうるわしい姿です。手すりの前からみると、山が深い。非常に深淵な幽邃なところだから、水がまた寒いという。これは自然界のあるがままの素晴らしい姿を言っているわけです。

農業にかぎらない。内村先生は大自然が好きだった。いつか、内村先生の息子さんが何かに書いていた。

「内村鑑三から自然をとってしまつたら、非常に欠けてしまうぞ」

と。ゲーテがそうです。内村先生とゲーテは人間的にずいぶん違うけれども、また共通なものを持っている。

「神―自然―我」

がずっと一貫して一如の境地にある。その点では、内村先生はまだちよつと観念的なところがあつたけれども、先生はとにかく全人格でぶち当たっていたね、何をするのでも。

● 枯木龍吟

髑髏識尽きて喜何ぞ立らん、

骸骨はもう意識が尽きている、と思うけれども、喜びが骸骨の中にもちゃんと含まれて



いるんだぞと。この「喜」というのは喜怒哀楽ということ。漢文というのは表現にそういう幅をもっているから、文字面だけではわからない。この「喜」の字に喜怒哀楽が全部入っている。漢文というのはそういう弾力性のある表現の仕方をする。喜怒哀楽がみんな骸骨の中にある。枯れているようだが、どっこいそれは枯れていない。エゼキエル書37章に枯骨の復活というのがあがるが、枯れた骨が復活する。

枯木龍吟こぼくりようぎんして銷さゆるも未だ乾かず。

死んでいるようで死んでない。枯木は春になればまた芽を吹く。もうダメかと思つたら風が吹くと枯木が風に当たって龍の如くに吟ずるといふ。銷しやうして即ち枯れてしまつていなければならない。どっこい枝の中には命が通つていふ。春がくれば芽が吹き出す。復活する。だから「枯木龍吟銷して未だ乾かず」といふのは復活を約束されている枯木の姿です。

難かたし難し。

これは簡単なようだけれども、そう簡単なことではないよと。至道無難だけれども――至道は無難だけれども、そこに飛び込めば非常に易しいが――飛び込まないとこんな難しいことはないといふことです。福音もその通り。いい加減な信仰はいつまでたつても始まらない。「いい加減な信仰」と言つても、自分の信仰を強くしろと言ふことではないですよ。

「自分の信仰にも絶信ぜつしんしなさい。そうすると、本当の信がきますよ」

ということ。何となく気合がわかりましたか。本当に自分がぶつつぶれてごらん、キリストの十字架で。俄然、力がくるから。私はちよつと異言がでさうになつて困る。

まあ、ながいこと無教会で私は観念信仰の中にいた。すじはいんだよ。すじだけなんだ、無教会というの。こないだ手島さんの人たちが少し来たから、もうはつきり言つてやつたよ、いろいろ。無教会を知らないからね。一言目には、

「藤井武先生、黒崎幸吉先生、三谷高正先生」

なんて言つて、まつり上げていふ。もちろん、私は敬意は表しますよ。けれども、こと聖霊のことになつたら、承知しないです。

聖霊の権威というものは学問とは違ふ。皆さんは最高の権威を持ち得る。無条件に持ちうるものが最高のものなんです。その人の生まれだとか、素質だとか、いろんな相対的な条件はある。

「そんなものよいのがよ」

なんて思つたら、とんでもない間違いです。誰でもが無条件に得られるものが最高最深のもの。十字架も聖霊もそういうものです。

そうすると、仏教であろうと何であろうと全部つかめてくるから、不思議でしょうがない。そういうつかみ方が普通のキリスト教ではできないんです、聖霊の世界に来てないから。すぐ宗派根性になつてしまふ。本当のものが見えない。



本当のものに対して私は無条件に敬意を表します。ただ、御霊の世界ではそれをほとんど伸ばすことができる。全部包んでしまう。著作集第三巻『無の神学』ではどうしても私はそれを書かざるを得ない。まだ誰も書いたことのない神学を書きますから。

「**揀択**と明白と、君自ら看よ。」

「**揀択**」というのは、いろんな相対的なことです。善悪だとか、醜美だとか、強弱だとか、貧富だとか、そういったような相対界のことをいうんだそう。明白」とは絶対のこと。非常にまっ白な無色透明な世界です。要するに、

「**相対と絶対を君自ら看よ**」

と。相対と絶対を自ら見てみると。相対が本当にわかれば、絶対がわかってくるし、絶対を本当に見ようとすれば、相対の世界がまたわかってくる。そうすると、**揀択と明白は自在**につかめるようになる。

「**我を見し者は父を見しなり**」

という。地上のキリストはこの「**揀択**」なんだよ。見たところ相対的な存在なんです。ところが、その中にどっこい明白が、絶対がちゃんと巣をつくっている。絶対がちゃんと生きています。

「**なぜ、私のことを善いと言うか**」

なんてキリストは言っている。自分は何者でもない。そこに本当の「明白」が、絶対がきている。こんなありがたいことはないではないですか。

「**私は何も言えない。何もできない。ちつとも善くはない**」

とキリストが言っているんだから。無善、無行、無教、その無者が無限無量者なんです。こんなはつきりしたことはない。だから、「**至道無難**」なんだ。それをゴタゴタゴタ、「**揀択**」の世界ばかりやっているから、「**難難**」になってしまう。

私たちがこの復活のキリストにでつくわす。復活のキリストだけではまだダメなんだよ、使徒たちは。もう一つ先の聖霊が臨んでこない。聖霊が臨んでこない、復活のキリストにでつくわして彼らは目がさめて立ち上がったけれども、まだダメなんだ、あれだけだった。祈りこんでいて、聖霊が来たものだから、今度ははつきりわかった。それが使徒行伝の世界です。キリスト教はそこから始まる。

こんなはつきりしたことはないのに、なぜ、今のクリスチャンは使徒行伝をもう一遍、自分でやり返しをしないんですか。自分でやり返しをしなければダメです。

「**使徒行伝というのは二千年前の話ですよ**」

なんて、そうじゃない。今、現在化しないでどうしますか。

「**廓然無聖**」

というのは、一切を包むように広々として、聖だの俗だのと、そんなことではないということ。さすがは達磨さんだよ。まだ相対的に善悪だとか、いわゆる有と無と言ってみ



たり、いわゆる聖と俗なんて言っている世界ではないという。そういう意味の「無聖」の「無」の字です。そうすると、何を見ても本当に見えてくる。

●地上において甦りの生命をいただく

今日はきれいなユリの花をたくさんありがとうございました。復活節にはユリの花を飾る。そして、「うるわしのしらゆり」の讚美歌を女の方に歌っていただく。私が内村先生の大手町の集会に行った最初の復活節は——今でも忘れません——4月1日でした。その時に——五百人位いたね——内村先生はこの歌を女性だけに歌わせて、まずきれいだっただね。それから私もそういうようにしている。

大体、復活のキリストに最初に会って、躓かなかつたのは女性なんだよな。マグダラのマリヤが一番先にキリストにでつくわしている。彼女は一番やつかいな女性だった。ところが、これがひっくり返されて、完全にキリストに救われて、もう彼女はうれしくてたまらない。ロダンはマリヤが十字架のキリストにしがみついているような、あんな彫刻をしちゃったね。あれはずいぶん大胆な彫刻です。十字架のキリストに、なにもマグダラマリヤはしがみつきはしなかつたけれども。さすがロダンは芸術家だから仕方がない。

キリストは霊体をもって現れた。ルカ伝だけです、こんなに詳しく復活のキリストのことを書いているのは。24章13節からのエマオ途上のことは『無者キリスト』にも書いてありますから、またどうぞ読んでください。

その先のところに不思議なことが書いてあつたでしょ。こんなことは普通はわからないんだよな。お魚を食べたことが書いてある。戸が閉じていてもキリストは入ってきた。そして、みんなが怪しんだら、キリストは、

「平安、汝らに在れ」

と言った。

³⁶此等のことを語る程に、イエスその中に立ち、『平安なんじらに在れ』と言

い給う。

「平安」というのは「シャーローム」という字です。「シャーローム・ラケム」という。

³⁷かれら怖じ懼れて見る所のものを霊ならんと思いに、

幽霊かと思つた。

³⁸イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、³⁹我が

手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我に

はあり、汝らの見るごとし』

まあ大変な言葉です。「これは作りごとだ」なんて普通言うんだよ。作りごとではない。

⁴⁰斯く言いて手と足を示し給う。⁴¹かれら歡喜の余りに信ぜずして怪しめる時、

まだ信ずることができない。あまり以外なことだからね。こういう表現がいかにそれがそ



の時の現実であるかということがわかる。そうでなければ、こんな書き方はできないよな。
 イエス言い給う『此処に何か食物あるか』⁴²かれら炙りたる魚一片を捧げた
 れば、⁴³之を取り、その前にて食し給えり。

「なんだ、お前たちは!？」

と。学者なんてものはかわいそうなものだ。私はバカですからね、こういうのをそのまま受けとる。大変な現実です。

⁴⁴また言い給う『これらの事は我がなお汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言いし所なり』⁴⁵ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う、⁴⁶『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦えり、⁴⁷且その名によりて罪の赦を得さする悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの国人に宣伝えらるべしと。⁴⁸汝らは此等のことの証人なり。⁴⁹視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留まれ』

そして、使徒行伝に入ってきて、彼らは都にとどまって祈っていたら——四十日間復活のキリストは現れてきたけれども——それからあと十日間祈っていたら、今度は聖霊が臨んできた。ペンテコステになる。五十日祭、「五旬節」です。

私たちはいずれそのうちにみんな死にます。けれども、甦りの生命、復活の生命を御霊にあるかぎりいただきます。霊体を着せられます。我々は内村鑑三の流れだけでも、いわゆる無教会ではない。もっと勇ましく、もっと本当の御霊の力でもって、みなさんが展開していただかなくては。ボヤボヤしていたらダメだよ。そして、毎日の生活で実践してください。人を助けてください。これが、御霊において甦りの生命があるかないかということです。

既に地上において甦りの生命をいただいているいなかったら、しょうがないものな。だから、いつ死んでもいいんだよ。聖霊を持っているということは、キリストと一緒に甦りの生命をいただいているということです。

「われキリストと共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず、キリストわがうちにありて生きたもつなり」
 というのは、

「キリストの甦りの生命が御霊に在って私の中に生きてますよ」
 ということです。終わります。

